

○住吉正・大段秀記
(九州沖縄農研)

【目的】

近年、各地の麦作圃場においてイネ科雑草の蔓延が報告され、九州地域ではカズノグサや除草剤抵抗性スズメノテッポウの多発が問題とされてきた。著者らは、九州地域の麦作地帯における雑草発生の実態把握に向けて現地調査を継続しているが、一部の圃場においてスズメノテッポウの類似草種であるセトガヤの繁茂した圃場が認められた。これまでセトガヤを問題雑草として取り上げた事例は少なく、発生状況や麦作への影響、防除における問題点などは十分に検討されていない。そこで、セトガヤの麦作雑草としての実態を明確にするため、まずは発生状況を調査した。

【材料および方法】

調査は2011年4月～5月に行った。北部九州の麦作地帯において、数筆以上の麦作圃場が隣接している地区を調査地点として選び、1地点につき6筆の圃場におけるセトガヤとスズメノテッポウの発生密度を調査した。発生密度は達観により、1筆毎に表1に示す基準で0～5の6段階で評価し、6筆の評価値の平均値を調査地点の発生程度とした。

表1 発生密度の調査基準

評価値	発生状況
0	発生無し
1	1筆当たり1～2本発生
2	1筆当たり3本～数本程度発生
3	評価値2と4の間
4	1本/m ² 以上の密度で、圃場全体に発生
5	条間を埋め尽くすように発生

【結果および考察】

全調査地点数は66となり、スズメノテッポウは全ての地点で発生が確認されたが、セトガヤは55% (36地点) で発生が確認された。各地点における発生程度は、スズメノテッポウでは3.1～4.0の範囲に最も多く分布し、全地点の平均値は3.4と高かった(図1)。一方、セトガヤでは発生の無かった地点(発生程度0)が最も多く、発生が認められた地点の発生程度は0.1～1.0の範囲に最も多く分布した。セトガヤの発生程度の全地点平均値は0.7とスズメノテッポウに比べて低かった。

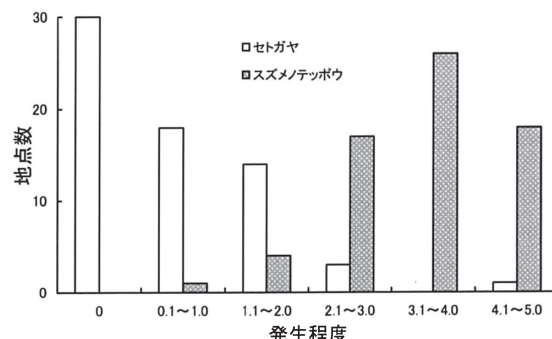


図1 セトガヤとスズメノテッポウの発生程度の頻度分布

次に、セトガヤの発生における地理的な特徴を見ると、発生の無かった地点の大半は筑紫平野に位置していた。その他の地域ではセトガヤの発生が確認された地点が少なからず含まれており、セトガヤの発生には地域的な偏りが認められた(図2)。この内、福岡県東部の豊前地域とその周辺地域では発生程度の高い地点が多く、福岡県みやこ町の調査地点(発生程度4.3)では発生密度5の圃場が2筆、発生密度4の圃場が4筆で、セトガヤが蔓延した状態であった。また、福岡県嘉麻市(発生程度2.3)及び行橋市(同2.8)、大分県中津市(同1.5)のそれぞれの調査地点では発生密度4の圃場がいずれも1筆ずつ確認された。

以上のように、セトガヤは北部九州全体では発生密度はそれほど高くはないものの、ごく一部の地域では既に蔓延状態となっている。したがって、発生に関わる要因解析や防除法の検討を急ぐとともに、今後の発生動向を注視して行く必要がある。

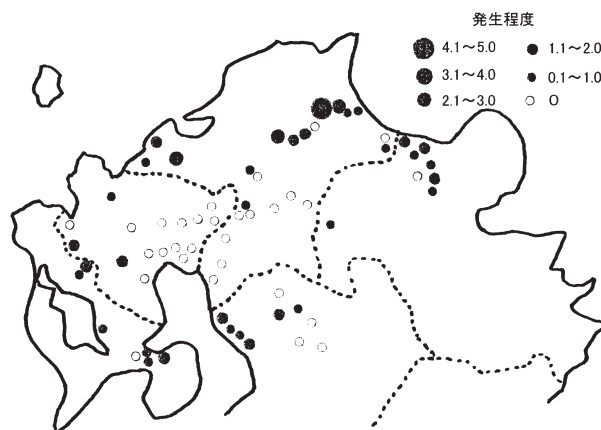


図2 北部九州の麦圃におけるセトガヤの発生状況